

いぶき9号平成23年10月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第8回：リュドヴィック・ド・ボーヴォワール（1846～1929年）



住民すべての丁重さと愛想のよさに、どんなに驚かされたか話すことは難しい。

「アナタ、オハイオ」（ボンジュール、サリュ）、馬をとばして通り過ぎるわれわれを見送って、茶屋の娘たちは笑顔一杯に叫んだ。耕作している者はみな、田圃の中へ熊手をおきざりにしたまま駆けつけるなり、畦道の上で微笑して、「オハイオ」といった。

「オハイオ、オメト」、これが道ですれちがう男女の旅人すべての言葉であった。（出典「ジャポン1867年」有隣堂）

フランス青年貴族のボーヴォワールが来日したのは、大政奉還の半年前、慶応3年（1867）の春でした。彼は進んで遠出して普通の日本人の人々と交流することを好みましたが、横浜郊外の農民はみな誰彼となく、初めて見る外国人にも笑顔で明るく声をかけてくれることに感動したようです。また、幕末のスイス領事リンダウも長崎において「火を求めて農家に行くと、子供があわてて火鉢を持って来てくれ、父親は私に腰掛けるよう勧め、母親は丁寧に挨拶をしてお茶を出し、子供達は丁寧に敬礼して優しく微笑んだ」という態度に出会って驚いています。かくも外国人に感銘を不えたのは、豪華な食事でも高価な物品でもなく、子供らが摘んできた一輪の花と一杯のお茶と「オハイオ」などの明るい言葉、すなわち日本人の純朴で温かい心でした。（M.I.）